

Title	やおい論についての批判的考察と今日的課題
Author	石川, 優
Citation	人文研究. 60 巻, p.221-236.
Issue Date	2009-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	山野正彦教授 : 中島廣子教授 : ピエール・ラヴェル教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

やおい論についての批判的考察と今日的課題

石川 優

〈日本における女性作者と女性読者による男性間の恋愛／性愛を主題とした作品群、およびそれらを読み、書／描く行為を含む表現活動の総体〉としてのやおいは、1970年代以降多様なひろがりをもつサブカルチャーを形成し、世界的にも注目を集めている。80年代末から現在にいたるまでやおいに関する研究は着実に蓄積されつつある一方で、やおいの多義性ゆえに、先行研究の批判的検討という学術研究における基礎作業は充分になされているとはいえない。そこで本稿では、当事者性という点から先行するやおい論について検証し、相互の位置関係について把握することを目的とする。この作業を通じて、やおい論が全体として家父長的社会構造や女性の主体の問題と関連づけて展開されてきたことを明らかにするとともに、今日的課題として同性愛表現をめぐるやおいの表象暴力の問題とやおいの当事者である女性たちにおける〈批評の拒絶〉という身ぶりが存在することを指摘する。

1. 序論

〈女性作者と女性読者による男性間の恋愛／性愛を主題とした作品、およびそれらを読み、書／描く行為を含む表現活動の総体〉としてのやおいは、1970年代以降の日本において多様なひろがりをもつサブカルチャーを形成している。現在やおいは、マンガ、小説、アニメ、ゲーム、ドラマCDなどの形式をとり、商業誌や同人誌、インターネットなどのメディアで展開され、日本だけでなく海外からも注目を集める。

やおいに関する評論や学術論文が本格的に登場するのは80年代末以降である¹⁾。〈なぜ女性が男性同士の恋愛／性愛に熱狂するのか〉、〈女性にとってやおいは何であるのか〉などの問題構成に基づく研究は、現在にいたるまで着実に蓄積されつつあるといえる。しかし、その一方で、先行研究の整理および批判的検討という学術研究における基礎作業は充分になされているとはいえない。その理由のひとつとして、〈やおい〉に対するコンセンサスが形成されていない点が挙げられる。やおいは〈ジャンル名〉なのか〈女性の嗜好の一種〉なのか〈社会現象〉なのか。溝口は「ヤオイという名称で具体的にどの範囲の作品を指し示すのかの定義がなされないまま、論者によって、または同一の論者でも文脈によって揺れている」と指摘している〔溝口2003：27〕。やおいに関する言説は、このような〈揺れ〉を抱えたまま社会学や文学

研究、心理学などの文脈において断続的または断片的に展開されてきた。そして、このことはやおいに関するさまざまな言説を〈先行研究〉として横断的に概観し難いことの一因となっている。

以上の点から、混線しつつ散在しているやおいに関する言説を横断的に検証し、相互の位置関係について記述することは、〈やおいを語ること〉の今日的課題を確認する上でも必要な作業であると考えられる。本稿は、やおいの歴史的展開と主要なやおい論を時系列でたどる作業を通じて、〈やおいを語ること〉の現在を間接的に照射しようと試みるものである。本稿では、日本で出版された書籍、商業誌、学術誌、同人誌で発表された評論や学術研究を広く〈やおい論〉と称する。

本稿は、以下の構成にしたがって展開される。第一に、やおいの定義づけをおこない、そのサブジャンルの派生について確認し、概況を提示する。第二に、先行研究を参照しつつ、やおい論を詳細に検討し相互の位置関係について記述する。第三に、やおいにおける表象暴力の問題と当事者における〈批評の拒絶〉というやおい論をめぐる今日的課題について言及する。

2. やおいとは何か

2.1. 定義

本稿では、やおいを〈日本における、女性作者と女性読者による男性間の恋愛を主題とした作品群およびそれらを読み、書／描く行為を含む表現活動の総体〉と広く定義する。

そもそも、やおいとは〈やまなし、おちなし、意味なし〉の頭文字をとったものであり、70年代末にマンガ同人誌の共同体の中で生まれたとされる〔榎原1998：7、佐々木2005：414〕。女性たちが同人誌上で発表した数頁のごく短い作品を〈起承転結を欠いたもの〉として自嘲的に評したことが始まりとされる。それらの作品でしばしば少年や青年間の恋愛／性愛が描かれたため、次第にやおいは本来の本来の語意をずらした用法、すなわち〈男性同士の恋愛／性愛を主題とした女性向の作品〉、狭義ではその二次創作（既存の作品を下敷きとしたファンによる二次的な表現行為および表現物）を指すジャンル名として定着した。ジャンル名としてのやおいは、80年代の同人誌ブームを経て広く知られるようになった。

本稿では、ジャンル名としてのやおいを指す場合は括弧なしで表記し、ジャンル名だけでなく〈それらを読み、書／描く行為を含む表現活動の総体〉としてとらえる場合は〈やおい〉と括弧つきで表記する。単なるジャンル名だけでなく〈やおい〉として広く定義する理由は、そのテキストが生成されるプロセスが女性たちの表現活動と密接に関わっているためである。次節で詳述するが、やおいは同人誌文化とともに展開してきた歴史があり、読み手と書／描き手が重なることがしばしばある。その場合、やおいのテキストは共同体の内部で〈読み合い—書／描き合う〉というプロセスを通して相互的に生成されていく。そこで、本稿では、テキスト

のみをやおいとして切り出すのではなく、その生成プロセスをも含め定義することによって〈やおい〉現象を多角的にとらえる。また、本稿が対象とするやおいのテキストは、小説およびマンガ形式のものに限定する。

2.2. 歴史と現状

やおい論の検証に移る前に、その歴史と現状を概観する。本稿ではやおいの歴史を第1期(1961～78年)、第2期(1978～91年)、第3期(1991年～現在)に区分した上で、やおいの歴史的展開とサブジャンルの派生を概観する²⁾。

第1期(1961～78年)は、60年代初頭の森茉莉の小説および70年代の〈24年組〉の少女マンガ家による少年愛マンガによって特徴づけられる。森鷗外の長女として生まれた森茉莉は、エッセイや評論だけでなく青少年同士の恋愛を描いた小説『恋人たちの森』(1961年)、『日曜日には僕は行かない』(1961年)、『枯葉の寝床』(1962年)などを発表し、これらの小説は栗本薫(中島梓)などの後続の世代に大きな影響を与えた。

70年代に入ると、24年組による少女マンガが話題を集めた。24年組とは、昭和24(1949)年前後生まれの少女マンガ家たちの総称であり、具体的には萩尾望都や竹宮恵子、山岸凉子、木原敏江、大島弓子などを指す。24年組の作品は表現技法の改革や「内面の発見」〔大塚2001:60〕などの点において少女マンガに変容をもたらしただけでなく、しばしば彼女たちが描いた少年の物語によっても注目された。萩尾『ポーの一族』(1972～76年)、『トーマの心臓』(1974年)、竹宮『風と木の詩』(1976～84年)、木原『摩利と新吾』(1977～84年)などに代表される少年の性／愛を扱った作品は、主人公たちの「少女と見まごう可憐な顔立ち」〔藤本2001:136〕から〈美少年／少年愛マンガ〉とも呼ばれた。これらの森茉莉の小説や24年組の少年愛マンガは、後続する〈やおい〉の隆盛に先鞭をつけたといえる。

次に、第2期(1978～91年)は『June』と同人誌の時代と位置づけられる。『June』とは、78年にサン出版より創刊された男性同士の恋愛などを扱った女性向けのコミック・文芸誌である³⁾。編集長を務めた佐川俊彦は24年組の少年愛マンガと同人誌界に精通しており、当時着実に支持を得つつあったやおい同人誌に着目した。石田は『June』を「女の子のための耽美雑誌」であったとし、具体的には「男性身体とそこに発露するエロティシズムを積極的に論じる態度」および「官能の異国としてのヨーロッパ受容」の2点を標榜していたと論じる〔石田2006:92〕。のちに『June』はこのように〈耽美〉なイメージをまとったやおい作品を指すジャンル名としても定着した。本稿ではジャンル名を指す場合は〈June〉と表記する。また、小説家・批評家である中島梓は「中島梓の小説道場」を同誌に連載し投稿小説の評定をおこない、秋月こおなどのプロのやおい作家を多数排出した。

一方、第2期を特徴づけるのは同人誌の隆盛である。75年に誕生した同人誌即売会コミックマーケット(以下、コミケット)は、第1回には推定700人、80年9月には7,000人、90年12月

には250,000人の参加者を集める巨大イベントに成長した〔コミックマーケット準備会編2005：32, 80, 150〕。コミケットが巨大化していく過程で大きな役割を果たしたのが、二次創作、とりわけ女性によるやおい二次創作である⁴⁾。やおい二次創作（以下、二次創作と略す）とは、原作の男性キャラクター同士の友情や敵対関係などを「イケナイ関係、つまり同性愛があると妄想」して〔栗原1993：336〕、その「妄想」をマンガ化、小説化する行為である。80年代半ば、少年マンガ『キャプテン翼』（高橋陽一、1981～88年）、『聖闘士星矢』（車田正美、1985～90年）、テレビアニメ『鎧伝サムライトルーパー』（1988～89年）などを原作とした二次創作の大ブームによって女性参加者が急増し、コミケットの規模が急速に拡大、同人誌文化全体の様相は大きく変容していった。阿島は当時を「『少女』達は、何とも不可解な生き物である」と述懐している〔阿島1987／2004：104〕。やおいという語が生まれ、ジャンル名として定着したのも第2期においてである。

第3期（1991年～現在）は、ボーイズラブの隆盛によるやおいの商業化および拡大の時代として位置づけられる。91年に雑誌『イマージュ』（白夜書房）の創刊号表紙に「BOY'S LOVE COMIC」と書かれたことを契機とし、90年代半ばには〈June〉と同様に〈ボーイズラブ〉が商業誌に掲載されるやおい作品を指す名称として一般化した〔山本他2005：14, 金田2006：168〕。『June』以外の商業誌が次々と登場し、90～95年の間に30誌近くのボーイズラブ誌が創刊された〔山本他2005：15〕。栗原は、94年の時点で、やおい小説のベストセラーは20万部に達し、その他の小説についても「最低1万部は確実に売れる」と述べている〔栗原1994：121〕。溝口は、市場としてのやおいは「他ジャンルに比べれば、比較的うまみのあるジャンル」と述べる〔溝口2003：32〕。

一方、90年代以降もコミケットの規模は拡大し続け、2007年12月には参加者は500,000人に達した。2004年の調査では、サークル（同人活動をおこなう個人またはグループ）参加者の約7割が女性であることが判明している〔コミケット2008：1296〕。このように商業誌と同人誌の規模が拡大して市場として確立されるにつれ、同人誌で活動する作家が商業誌に移行し、商業活動と並行して同人活動を続けるケースが増加している。やおいは、経済活動および人材供給という点において商業と同人誌の間に密接な関係を築きながら、その規模を拡大させてきたといえる。

以上、1961年の森茉莉の小説から現在のボーイズラブの隆盛に至るまで、40年あまりの歴史を概観してきた。現象としての〈やおい〉は、第1期においては〈少年愛マンガ〉、第2期には〈June〉と〈二次創作〉、第3期には〈ボーイズラブ〉などのサブジャンルを生み出した⁵⁾。これらのサブジャンルは、時系列を追って派生しながら現在もそれぞれが並存している。各サブジャンルの読者および作者は部分的に重なりつつ、サブジャンル間を自由に行き来することによって〈やおい〉という巨大な表現空間を構築している。

3. やおい論の批判的考察

3.1. やおい論の展開

それでは、このように多様に展開する〈やおい〉はどのように語られ、論じられてきたのか。金田によると、第2期を踏まえたやおい論が現れるのは80年代末であるという〔金田2007a：168〕。金田は従来のやおい論の理論的支柱は主にジェンダー論であるとし、それらの主張を6点にまとめる。以下、金田による分類を紹介する。

1. 女性にとって性は不安や恐怖を伴って認識される。やおいは、この性の恐怖からの逃避である。
2. 女性が女性嫌悪（ミソジニー）を抱くと、女性でない存在（それは男性としてしか表象されない）に自己同一化しようとする。それがやおいとして現れる。
3. やおいにおいて、男性を女性的な存在（「受」）に貶めることは、女性の男性に対する復讐である。
4. やおいはジェンダー秩序が隠蔽しているものを暴露し、ジェンダー秩序を転覆する可能性をもつ。
5. やおいが女性にとって快楽となるのは、そこで描かれる恋愛にジェンダーによる権力関係がないから、また現実の性と直接関連していないからである。
6. やおいにみられる女性のセクシュアリティは、対象への欲望ではなく、関係そのものへの欲望である。〔同、168-169〕

以上の流れを踏まえた上で、金田は80年代以降のやおい論は大きな傾向として「はじめは逃避や女性嫌悪、復讐など否定的だったものが、異性愛秩序の転覆や、女性に固有の快楽という肯定的なものへと変わってきた」と述べる〔同、169〕。また、藤本は、やおい論は「なぜ、女性が、「男どうしの愛」を描いた作品を好んで読むのか」という心理学的・社会的な問いから「それによって何が可能になったのか」という機能や効果の検討に転換したと述べている〔藤本2007：41〕。本稿では、やおい論の〈否定から肯定へ〉あるいは〈原因の探求から効果の検討へ〉という変遷・移行そのものではなく、そのような流れの中でやおい論が誰に対してどのように語られてきたのか、という点に着目したい。以上を踏まえた上で、ここでは以下のやおい論をとりあげる。

第一に、〈June〉の創始者としての中島梓のやおい論。

第二に、二次創作の担い手としての野火ノビタのやおい論。

第三に、以上を踏まえた上での、異性愛規範と同性愛嫌悪をめぐるやおい論。

これらのやおい論は時系列順に発表されたものであり、他の文献における引用参照回数の多さからみてもやおい論全体に対して一定の影響をもつと考えられる。また、これらのやおい論は何らかの形で〈やおい〉に関わる当事者による論考である。これは「外国人のように、そして歴史家のように」〔上野1998：125-126〕語られるやおい論の排除を意図するものではないが、本稿はやおい共同体における当事者性に着目するためこれらの論考を選択した。

3.2. ディスココミュニケーションとしてのやおい

本格的なやおい論は、91年の中島梓『コミュニケーション不全症候群』に始まるといっている〔金田2007a：49、溝口2003：33〕。中島は、小説家（栗本薫）として男性同士の恋愛小説『真夜中の天使』（1979年）、『終わりのないラブソング』（1991～95年）などを発表する一方で『June』の隆盛に大きく寄与し、評論活動をもおこなっている。中島の主要なやおい論は『コミュニケーション不全症候群』（1991年）および『タナトスの子供たち：過剰適応の生態学』（1998年、以下『タナトスの子供たち』と略記）である。双方での中島の主張はほぼ変わらないが、ここでは主に〈やおい〉について集中的に論じた後者をとりあげる。

『タナトスの子供たち』において、中島は〈やおい〉の定義づけを明確にはおこなっていない。それは〈女性が書／描き女性が読む男性間の恋愛／性愛を主題とした作品群およびその現象〉といった広い意味で用いられている。したがって、その語の指示対象はときとして〈June〉でありボーイズラブであり、マンガであり小説であり、社会現象であり、個人の嗜好でもある。その揺らぎは〈やおい〉という語をジャンル名や社会現象としてだけでなく「ひとはなぜやおうのか」などの形に活用させている点からも伺える〔中島1998／2005：25〕。

『タナトスの子供たち』は大きな流れとして、第一にやおいのテキスト分析とりわけ「ゴールデン・パターン」の分析、第二に女性たちの主体の問題についての考察、第三に社会構造との関連、という構成をもつ。

まず中島は、やおい作品は女性による女性のための「究極の恋愛ファンタジー」であり、現実社会における男性同性愛との関連性はないとする〔同、31〕。一般的に、やおいでは主要人物となる男性同士は〈攻め〉、〈受け〉という形式を通して関係性が固定される⁶⁾。攻めとは、性行為において挿入する側または2人の関係性において将来的にそれが予感される側であり、受けとは挿入される側または将来的にそれを予感させる側を意味する。中島によると、やおいの物語内容にはこのように固定化された関係性を基点とした定型があるという。それは強姦（それは必ずアナルセックスの形をとる）から始まる物語である。ただし、やおいにおける強姦は劣情による暴力ではなく、攻めによる過剰な愛の発露として表現される〔同、88-89〕。

つねにやおいにおいては、強姦は「物語のはじまり」である。強姦、というディスコミュニケーション的行動が、相互理解であるコミュニケーションの存在しなかったところにコ

コミュニケーションを開き、強引に結びつけられた両者の人間関係を「らぶらぶ」に運んでゆく。〔同、77〕

しかし、中島はやおいにおける強姦を〈ディスコミュニケーションからコミュニケーションへの発展〉ではなく〈ディスコミュニケーションの拡大〉としてとらえ、やおいは〈ディスコミュニケーションのファンタジー〉であるとする〔同、78〕。同性であるということ、役割が固定されているということ、物語に強固な定型(強姦から「らぶらぶ」へ)があるということは「コミュニケーションのための言語を必要としない」、同質の世界を構築する〔同、89、傍点の中島による〕。中島は「やおいの世界において存在するかのように見せかけられている異物はつねに、「さいごの同一化をたかめるため」だけの異物」と論じる〔同、128-129〕。のちに述べるが、やおいを〈男同士＝同質〉のファンタジーとみなすことからわかるように、中島のやおい論の背景には異性間のみコミュニケーションの可能性を見出す、根強い異性愛規範が存在している。

中島によると、このような〈同質〉のディスコミュニケーションとしての世界は、男性優位の社会構造からあらかじめ疎外されている少女たちが編み出した癒しのファンタジーである〔同、197〕。やおいに恋愛者としての女性が登場しないのは、現実社会においてつねに性的客体として生きることを強えられる女性が、ジェンダーの束縛から逃れようとするためである。したがって、やおいは社会からの束縛と無縁の次元において女性自身が愛し／愛されるための物語であり、男性キャラクターは女性の理想を仮託される依代にすぎない〔同、128-129〕。閉じた虚構世界における女性による〈愛と性の自作自演〉という意味においてもやおいはやはり〈ディスコミュニケーションのファンタジー〉である。中島は、やおいは「疎外され、居場所を失い—ないし与えられなかった少女たちが見出した、究極の内宇宙、彼女たちにあたえられた社会の環境のゆがみがもたらした、いびつな、しかし幸福な性と愛との新しいエデンであった」と結論づける〔同、244〕。

中島がやおいにおける男同士の性愛を〈同質〉であるがゆえのディスコミュニケーションとみなすとき(それはじつは女性によって仮託された依代であるにせよ、とりあえずは男性の形をとる)、そこには異性愛を中心とした認識の枠組が存在している。中島は、異性愛は男女という「異質」のもの同士であるがゆえに本来的にコミュニケーション可能であり、「ごくまとも」なやおい愛好者ならば現実社会では「一様に夫持ち、子持ち」、すなわちコミュニケーションに成功した適応者であり、そうしない／できない者は「ディスコミュニケーション種族」とする〔同、109、189〕。中島が、女性がやおいを求める背景には〈良妻賢母〉といった女性像を強いる社会制度があると論じる一方で、その社会制度に参画する(「一様に夫持ち、子持ち」)ことを〈コミュニケーション＝社会適応〉とみなすとき、家父長的な社会構造はさらに強化される。異性愛を前提とした言説に与することによって、結果的に中島は〈社会から疎

外されている)と自らが論じるやおい少女たちをより一層孤独にさせることになる。やおいというジャンルの確立に少なからず寄与した中島が、自身を社会適応者として〈安全圏〉に置きながら、やおいに留まる女性を社会不適応者とみなしていることはある意味では興味深い。中島は、一貫して自らを〈やおい〉の外部に位置づけている〔同、96-97〕。それは〈やおい〉を分析対象として扱うための客体化の作業というよりはむしろ、中島の表現者としての自意識と時代性によるものと考えられる。

石田が指摘するように、中島は79年に発行された「June」(当時は「Comic Jun」)2号において「われわれJUN文学ファンは、決して、ソレさえ出れば満足する、というほど低次元であってはなるまい。あくまでも、文学的にもすぐれ、かつ美学的に洗練されたものでなくてはJUN文学と認めるわけにはいかない」と述べている〔石田2007、あかぎ監修1979:131〕。この表明から、中島が早い段階から文学的・美学的に洗練された〈June〉小説の制作と受容を標榜し読者にそれを啓蒙する立場として自らを位置づけていたことがわかる。のちに中島は、森茉莉の直系としての自らの作品、さらにその後継としての初期の〈June〉小説を「母の不在」の物語であるとし、さらに「父の不在」つまり見捨てられた孤児たちの物語と「父と子」のエディプス・コンプレックスの物語に分類したが〔中島1991 / 1995:208-209〕、このように切実な物語は安定した世界に留まろうとする「いまのヤオイ」〔中島1998 / 2005:258〕、つまり〈ディスコミュニケーション〉の物語としての90年代以降の二次創作やボーイズラブには存在しないとする。その意味において、中島は「私の極私的ファンタジー」としてやおいを愛好しているにもかかわらず〔同、99〕、自らを世代的にも芸術家としても〈やおい〉の外に位置づけ、〈自分(の作品)以外のやおい〉論を展開しているといえる。

同時に、中島の主張は時代性と無関係ではない。とりわけ88年に発生した連続少女誘拐殺人事件が〈ディスコミュニケーション〉という中島の着想に強い影響を与えている事実は否定できないだろう。事件以降、マスメディアによって苛烈な〈オタクバッシング〉が展開されたことはよく知られている。このことにより男性オタクが「自宅にこもっている人付き合いの悪い、暗い(あるいは危ない)人間」といった〈オタク像〉をラベリングされたように〔斎藤2000 / 2005:24〕、やおいを愛好する女性についてもまた「体重が100キログラムあって、髪の毛はぼーぼーで、プスで、三〇代で、未婚で、男性とつきあったことがなく、処女」といった偏向したイメージが流布されてきた〔金巻2007:45〕。中島がそのような他者=社会からのまなざしを意識していたことは、自身を筆頭とする「ごくまとも」なやおい愛好者を「夫持ち、子持ち」の社会適応者と論じるその身ぶりからも伺える。

3.3. 〈愛の装置〉としてのやおい

中島がやおいを社会不適応の表現とみなす一方で、野火ノビタはそれとは対照的なやおい論を展開する。野火は、マンガ家として二次創作を発表する一方で商業誌でも活動している。思

春期に24年組の少年愛マンガ、〈June〉、二次創作を読んできた野火の立脚点は〈二次創作の描き手〉として一貫している。野火のやおい論は頒布誌が初出であり、大幅に改稿されたのち『大人は判ってくれない：野火ノビタ批評集成』（2003年）として出版され、2004年にセンス・オブ・ジェンダー賞特別賞を受賞している。ここでは主に書籍版のやおい論を分析対象とするが、野火の立脚点や当事者意識を知る上で一部同人誌版を参照している。

具体的な内容分析に入る前に、野火がやおい論を執筆した経緯について述べておく。第一に、野火は先行する〈やおい＝逃避論〉に反論する立場をとってやおい論を展開したということ。同人誌版において、野火は「やおいは現実逃避である。だからやおいなんか捨てて現実を見よ」という文を、正論と感じた全ての人」に対して語る、と宣言している〔野火1993／1998：158〕。第二に、野火のやおい論の一部はいわゆる〈やおい論争〉の中で展開されたということ⁷⁾。やおい論争とは、佐藤雅樹がゲイとしての立場からやおいにおけるゲイの差別表現を指摘したことに始まる論争であり、92年から4年間にわたってフェミニズム系のミニコミ誌『CHOISIR』で展開された。それは、社会的現実に対してあまりにも無自覚のまま男性同性愛の表現物を消費する女性に対する警告であり、異議申し立てであった。論者はミニコミ誌の原本を確認していないため詳細を述べることは差し控えるが、野火は「既成の漫画アニメ作品からキャラクターを借り、男と男のラブストーリーを捏造しては売っている、典型的なやおい少女」としてこの論争に関わっていたという〔野火1993／1998：158〕⁸⁾。書籍版では以上の経緯については触れられていないが、野火の立脚点は同人誌版から一貫共通していると考えられるためここで指摘しておく。

野火によるやおい論は、中島と同様にやおいを女性による〈愛の自作自演〉にとらえながらも、そこには対等なコミュニケーションが存在すると主張する点で、中島のディスコミュニケーションとしてのやおい論とは対照的である⁹⁾。野火個人をサンプルケースとしている点で、野火のやおい論はある意味では赤裸々な女性の主体の問題として展開される。

野火は、やおいは現実の男性同性愛とは関係ない女性のファンタジーであるとした上で〈なぜ男同士の性愛を、当事者でない女性が楽しむことができるのか〉と問いかける〔野火2003：240-241〕。この問いに対して、野火はやおいにおける〈性愛〉を〈性行為〉と〈愛〉に分類した上で次のように論じる。

第一に、〈性行為〉の点について、女性は〈男の肉体〉をもたないために逆説的に男性同士の性関係に対して空想的に感情移入することができるとする。たしかに女性はやおいにおける恋愛および性関係の「当事者でない」が、「感覚的には「当事者である」」〔同、244、傍点は引用者による〕。野火によると「当事者でない」ことは男性双方への感情移入をも可能にする。受けに感情移入することによって女性は攻めに〈犯される〉こともでき、攻めに感情移入することによって受けを〈犯す〉ことができる。双方への感情移入は自由に行なわれ、女性は愛と欲望の主権を獲得する。それは、現代社会においてつねに性的客体を強いられる女性の男性に

対する「復讐」であり、女性が〈欲望する主体〉となるための手段である〔同、251〕。

第二に、〈愛〉の側面について、野火は関係の対等性と愛の純然性を挙げる。前者について野火は女性における女性嫌悪を指摘する。「彼女は単に自分自身でありたいだけなのだが、そのためには自分が女性であることが不都合だと感じている」〔同、259〕。やおいにおける攻めと受けの関係性は、精神的にも肉体的にも強固なヒエラルキーの存在を意味しない（少なくとも、現実社会における男女関係ほどには）。その意味において、やおいというファンタジーの中で女性は「女である自分の現実の肉体を脱ぎ捨て」ることができる〔同、263〕。女性が〈男女〉でも〈女同士〉でもなく〈男同士〉の物語を求める一因には、このような女性嫌悪がある。また、後者の愛の純然性については、やおいにおいては性別ではなく〈相手自身であること〉が愛の根拠とされるため（「自分は男が好きなのではなく、お前が好きなのだ」）性差が無効化された次元において〈ただ愛〉のみが存在するとする〔同、262〕。

「やおい」は「愛される」ための物語だ。でもそれだけではない。それは「愛する」ことによって「愛される」物語なのだ。それはたしかに自己完結である。閉じた回路である。だが、閉じているからこそ、そこでの愛は完全なのだ。〔同、270〕

このように、やおいは女性が現実社会における異性愛関係に絶望したときに自ら愛する者（攻め）と愛される者（受け）を演じる閉じた回路であり、閉じているがゆえに完璧な愛の装置である、と野火は結論づける。したがって、野火にとってやおいは「後ろ向きな、苦難からの逃走ではなく、もっとポジティブな理想への前進」である〔同、275〕。ただし、と野火は同人誌版の結びで注釈する。「ここで私が述べたことを、彼女たち全員が自ずから認識しているのではない。むしろこうしたことに彼女たちは眼をつむりたがるだろう」〔野火1993 / 1998 : 166〕。無自覚的にやおいを消費する当事者の中で〈眼〉をひらき、他者に対して語る野火のやおい論は、その意味で希少であると考えられる。

3.4. やおいにみる異性愛規範とホモフォビア

すでに述べたように、野火のやおい論の背景には2つの経緯がある。それは〈やおいは現実逃避である〉とする言説に対する反論と、〈やおい論争〉である。野火は先行文献を引用参照していないが、男性同士の関係性に有機的な絆を見出す点でも、〈やおい〉を「後ろ向き」ではなく「もっとポジティブ」な表現行為としてとらえる点でも、その論旨において中島の〈やおい〉論、ひいては社会に蔓延する〈否定的〉な〈やおい〉像に間接的に反論したといえるだろう。しかしその一方で、野火はやおい論争の争点については議論を避けているように思われる。

「やおい」はあくまでもファンタジーであり女性をつくりだした幻想であって、現実のゲイとは全く別のものだ。〔略〕だから「やおい」を好む女性は自分の幻想を現実のゲイ関係に決して押しつけてはならないし、ゲイの男性も彼女たちの幻想に傷つく必要はないのである。現実のゲイの男性は、彼女たちの幻想の当事者ではない。また、自明のことだが、彼女たちは現実のゲイ関係の当事者ではありえないのである。〔野火2003：240-241〕

やおいが女性の内的ファンタジーを表現していることは事実であるが、問題は〈女性によるファンタジー〉と〈現実のゲイ〉の間に境界を設定することではなく、やおいの表象暴力の危険性について当事者の女性たちがどのように思考するかではないか。やおい論争の中心的人物である佐藤は次のように述べる。

重要なのは、個々の場でどれだけ、自らの加害者性、被害者性を自覚できるかの問題だ。表現に関わる（送り手であろうが、受け手であろうが）ためには、それだけの覚悟が実際には必要なだろう。そういう感性が、あまりにも退化している。〔佐藤1996：168〕

やおい論は〈否／肯定的〉を問わず、何らかの形で女性についての視点を含んできた。それは少なからず、男性中心的社会制度や性役割を強えられる女性の主体の問題と関連づけられてきたが、〈やおい〉の存在が社会的に知られるにつれ、新たな視点からの問題提起がなされることになる。つまり、やおい論は支配的な社会制度に対峙して語るだけでなく、ゲイ男性からの問かけに当事者として応えることを求められたのである。

溝口は、レズビアン・フェミニストとしての立場からやおいを読解し、やおいのテキストにおける構造的なホモフォビアの内包を指摘する〔溝口2000〕。溝口によると、テキストの中で繰り返される「自分は男が好きなのではなく、お前が好きなのだ」〔野火2003：262〕という「ノンケ宣言」〔溝口2000：195〕は、やおいが異性愛規範主義的かつホモフォビクであることの証明である。本稿でとりあげたやおい論は、〈なぜ女性が男同士の恋愛を求めるのか〉という点について「「オトコであってさえ—それほどの障害をものりこえて」「君自身が君であるから、愛している」ファンタジーがある」と指摘してきた〔中島1998／2005：60〕。このやおいのファンタジーについて、溝口は二重化されたホモフォビアの装置である論じる。

やおい作品は、ホモフォビアを全面的に受容した上で、主人公たちの恋愛をドラマチックにしたための小道具として同性愛を利用しているのだ。さらに、恋愛関係に入っても繰り返される「俺はゲイじゃない。君だけが好きなんだ」という決まり文句は、今度は明らかに「男だから好きになる（本物の）ゲイは、変態だ」という意味をおびることになる。〔溝口2000：196〕

溝口よると異性愛女性にとって物語の主人公に男同士を選択することは〈禁断の愛〉または〈究極の愛〉を強調するための演出のひとつであり、さらに度重なる〈自分はゲイでない〉という表明はやおい作者／読者におけるゲイ差別である。やおいにおいて描かれる男性たちは女性が求める〈究極の愛〉の代理人であるが、「だからといって、やおいがホモフォビクな言説に二重に加担しているという事実が消えるわけではない」〔同、197〕。溝口のやおい論には、やおい論争における佐藤らの異議申し立てにも連なる問題提起が含まれていると考えられる。

佐藤が「男同士」という型を使ったときからすでに「現実の同性愛者」と切り離しては考えられない」と指摘するように〔佐藤1996：167〕、〈やおいは女性の内的ファンタジーであり、現実社会のゲイを描いたものではない〉という説明はこのような問題提起に対する主張としては機能し得ない。重要なのは、やおいにおける表象暴力の危険性を前に萎縮することではなく、自らの表現行為や表現物はあらゆる意味において〈他者〉にひらかれていることについて、やおいの当事者が思考していくことである。

溝口らの問題提起に対するやおい作者側からの応答であるかどうかは定かでないが、現在やおい作品ではゲイ・アイデンティティに自覚的なキャラクターが増加している。ボーイズラブ小説を対象とした藤本の調査によると、ゲイと明示される登場人物は92～94年時に比べ2倍以上であるという〔藤本2007b：92、2007年5月当時〕。このことは即座にやおいにおけるホモフォビアの消失を意味する訳ではないが、少なくともテキストにおけるジェンダー表現が表層的である可能性はあるにせよ変容している過程にあるといえるだろう。

4. 結論

本稿では、主に3者によるやおい論を検証してきた。それは第一に、少なからず〈やおい〉の当事者であるものが〈自分（の作品）はちがう〉と断りつつやおいをディスコミュニケーションのファンタジーであるとするやおい論、第二に、二次創作の担い手としてやおいを肯定的にとらえようとする、男性同士の関係性に誘発された女性による愛の装置とみなすやおい論であった。森茉莉の小説以降、一部の女性が作品の主題として男性同士の恋愛／性愛を選択し、その表現が女性たちの共同体を中心に醸成されてきたという事実は、社会構造との関連性など、さまざまなレベルにおいてやおい論を女／性論として展開する動機となる。上野は「オタクが性別対称性を持たない以上、〔略〕あまたある「オタク論」は、「男性論」であることの限界をわきまえるべきだ」と指摘するが〔上野2007：35〕、やおい論は緩やかな系譜として女性論を展開してきたといえる。次いで本稿では、第三のやおい論として、やおいにおける表象暴力、具体的には異性愛規範とホモフォビアの構造を指摘するやおい論をとりあげた。女性学からクィア研究へ。やおい共同体としては、男性中心の社会制度に対して論じる側からゲイの人々に向かって応える側へ。やおい論はこのように弁証法的に展開してきたといえる¹⁰⁾。

ただし、本稿でとりあげたやおい論は一定の影響をもつとはいえ、やおいに関する議論は他にも存在する。海外における二次創作であるSlash Fictionを紹介し、〈やおい〉の世界的隆盛は家父長的な社会構造が抑圧・隠蔽してきた女性的空想力がテクノロジーの発達に伴うメディアネットワークの膨張によって噴出したものであるとする小谷のやおい論や〔小谷1994〕、なぜ女性はやおいを目指すのかという〈原因〉を探求する従来の問題構成に対してやおいによって何が可能になるのかという〈効果〉の検討を目的とし、やおい小説の実証研究を通じて〈ジェンダーの娯楽化〉を指摘した永久保のやおい小説論など〔永久保2005〕、本稿が射程外に置く論考も存在する。やおい論は、定義、時代、対象、方法、視点、目的などの点において一部重なりながらも多様に展開されている。さまざまなやおい論が並存する言説空間において、その並存を相互連関的にとらえることが〈やおい〉の多様なあり方を論じる方途となるだろう。

このような状況の中で、やおい共同体の女性たちは〈私たちのことは放っておいてください〉と表明し続けている〔石田2007b〕。やおいを愛好する女性を指すネットスラングである〈腐女子〉とは女性たちが自らの嗜好を〈腐っている〉と自嘲的に称したことがはじまりとされるが〔金田2006：177〕、これは他者から指をさされる前に〈どうせ腐っていますから〉と先回りする保身のレトリックにほかならない。また、他者からの解釈を〈放っておいてください〉と拒絶すること以上に〈他者に対してやおいを語る当事者〉に向けられる〈裏切り者〉というレッテル貼りは、支配的な社会認識からの保身、それを内面化することによる相互監視制度、あるいはゲイの人々からの異議申し立てに対する黙殺の身ぶりにほかならない。今後〈やおい〉をより多角的に論じていくためには、このような隠蔽への執着と批評の拒絶という共同体の内部で作用する力学についても検討していかなければならないだろう。

【注】

- 1) 70年代に台頭した少年愛マンガのみを対象とした論考を除く。
- 2) 栗原による区分を基本的には採用しているが、栗原が第3期の開始時期を1988年とするのに対し〔栗原1993：326〕、本稿では〈ボーイズラブ〉という語の初出とされる1991年以降を第3期と定めた。
- 3) 厳密には、創刊時の誌名は『Comic Jun』（3号で『June』に改題）。その後、休刊時期を経て81年に復刊、82年には小説専門誌『小説June』を創刊した。本稿では表記を簡便にするため、これらを『June』と総称している。
- 4) 本稿では、やおい的な傾向をもつ二次創作に着目しているが、二次創作そのものには、やおいだけでなく男性のために制作された〈男性向け〉や性描写や恋愛要素を含まない〈健全もの〉などさまざまな傾向の作品が存在する。
- 5) 時系列を考慮するならば、第1期の作品をも〈やおい〉に含めることには異論があるかもしれない。森茉莉や24年組の作品は、やおいという語が誕生する以前に位置づけられるためである。また、(June)と二次創作についても、これらの語がまとう先入観、イメージ、作品傾向の異同、各参与者の〈棲み分け〉意識から、各々を別個のジャンルとしてとらえる場合もある。だが、本稿では〈女性が男性同士の恋愛物語を生産／消費せずにはいられない〉現象が60年代以降の日本に現れている点を重視し、時系列や個別の作品傾向に拘泥しない広い定義、すなわち〈日本における、女性作者と女性読者による男性

間の恋愛を主題とした作品群)として第1期から第3期に派生したサブジャンルを包括的にやおいと称している。

- 6) Aというキャラクターが攻め、Bが受けの場合は、〈A×B〉あるいは単に〈AB〉と表記される。また、攻めと受けが入れ替わり可能な場合は〈リバーシブル〉と呼ばれるが、傾向の多寡としては、攻めと受けの関係性は固定化されている場合の方が多い。
- 7) 論争の概要はウェブサイト「蜜の厨房」<http://hw001.gate01.com/kitchenmits/mits/>、佐藤の主張は「少女マンガとホモフォビア」(クィア・スタディーズ編集委員会編「クィア・スタディーズ'96:クィア・ジェネレーションの誕生」七つ森書館, 1996)で確認することができる。
- 8) 野火は「CHOISIR」に寄稿した経緯について「シユワジュールでのやおい論争を拝見させて頂き、場外で勝手な事を言っていたら、栗原さんから本誌ご招待を受けてしまった」と語っている【野火1998:158】。
- 9) 以下では、すべて書籍版を分析対象としている。
- 10) ただし本稿は、これによってやおい論の〈進化〉を示唆するものではない。やおい論の方向性は多岐にわたり、93年の時点で野火が反論の対象とした〈やおい=逃避論〉は現在でも存在する。ここで論者が指摘したいのは「すごく古い、既存のジェンダーを前提にした「やおい=逃避論」がまだ生きてた」【金田(座談会)2007:20】ということではない。既存の性役割を女性に再強制しているという点で〈やおい=逃避論〉が批判されるべきであることは論をまたないが、その批判は〈正しい〉やおい論を目指して展開されてはならない。現在または未来に〈正しい〉やおい論を想定した上で、過去の言説の〈欠点・欠陥〉に裁断を下すような目的論的な方法は、一部のやおいの当事者や他のマイノリティを抑圧する動きにつながりかねない。

【参考文献】

- あかぎはるな監修1979「世界Jun文学全集西洋篇」【Comic Jun】第2号
- 阿島俊2004「漫画同人誌エトセトラ'82-'98:状況論とレビューで読むおたく史」,久保書店
- 東園子2003「近代社会における異性愛形式の展開:恋愛の規範化と「宝塚」・「やおい」」【社会学雑誌】Vol.20,神戸大学社会学研究会
- 同2006「女同士の絆の認識論:「女性のホモソーシャルリティ」概念の可能性」【年報人間科学】第27号,大阪大学大学院人間科学研究科
- 同2007「女同が見せる夢:ファンは「宝塚」をどう見ているか」東園子他著「それぞれのファン研究」,風塵社
- 東浩紀,斎藤環,小谷真理2003「ポストモダン・オタク・セクシュアリティ」(鼎談)東浩紀編著【網状言論F改:ポストモダン・オタク・セクシュアリティ】青土社
- 足立典子1999「これは仮定だけど、そんなときはほく:少女まんがと同性愛」熊倉敬啓,千野香織【女?日本?美?:新たなジェンダー批評に向けて】慶應義塾大学出版
- 石田仁2007a「ゲイに共感する女性たち」【ユリイカ】第39号第7号,青土社
- 同2007b「「ほっといてください」という表明をめぐって:やおい/BLの自律性と表象の横奪」【ユリイカ】第39号第16号,青土社
- 石田美紀2006「70年代少女大衆文化における「耽美」の形成とその役割:コミック・文芸雑誌【June】を中心に」【比較文化研究】74号,日本比較文化学会
- 同2008「蜜やかな教育:〈やおい・ボーイズラブ〉前史」,洛北出版
- 上野千鶴子1998「発情装置:エロスのシナリオ」,筑摩書房
- 同2007「腐女子とはだれか?:サブカルルのジェンダー分析のための覚え書き」【ユリイカ】第39号第7号,青土社
- 大塚英志1989/2001「定本 物語消費論」,角川書店

- 同2005「『やおい』についていかに立論するか。」「comic新現実」vol.4, 角川書店
- 柿沼瑛子1995「“愛”を創り出す少女漫画家達：我が偏愛的少年愛マンガ論」『imago』, 青土社 第6巻第4号
- 笠間千浪2001「《解釈共同体》としての『やおい』サブカルチャー：消費社会の高度化と女性たちのオルタナティブな語り」竹中恵美子, 久場嬉子監修『叢書 現代の経済・社会とジェンダー：第3巻日本社会とジェンダー』, 明石書店
- 金田淳子2006「ヤオイ・イズ・アライヴ：わかりたいあなたのための、やおいマンガ・マップ」『ユリイカ』第38巻第1号, 青土社
- 同2007a「マンガ同人誌：解釈共同体のポリティクス」佐藤健二, 吉見俊哉編『文化の社会学』, 有斐閣
- 同2007b「やおい論、明日のためにその2。」『ユリイカ』第39号第16号, 青土社
- 金巻ともこ2007「腐女子業界の今とわたくしとイスカリオテのユダ」『ユリイカ』第39号第7号, 青土社
- 栗原知代1993「概論1：耽美小説とは何か」柿沼瑛子, 栗原知代編著『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』, 白夜書房
- 同1993「概論2：同人誌をめぐる考察」柿沼瑛子, 栗原知代編著『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』, 白夜書房
- 同1998「男同士の愛に少女たちが仮託するもの：『耽美小説』ブームを分析する」『創』3月号, 創出版
- 小谷真理1994『女性状無意識：テクノガイネーシス：女性SF論序説』, 勁草書房
- 同1999「おこげのススめ：カルト的男性論』, 青土社
- 同2003「おたクィーンはおたクィアの夢を見たワ。」東浩紀編著『網状言論F改：ポストモダン・オタク・セクシュアリティ』, 青土社
- 同2007「腐女子同士の絆：C文学とやおい的な欲望」『ユリイカ』第39号第16号, 青土社
- コミックマーケット準備会編2005『COMIC MARKET 30's FILE：1975-2005』, 青林工藝舎
- コミックマーケット準備会編2008『コミックマーケット74カタログ』, 有限会社コミケット
- 斎藤環2000 / 2005『戦闘美少女の精神分析』, 筑摩書房
- 同2003a「博士の奇妙な思春期』, 日本評論社
- 同2003b「『萌え』の象徴的身分」東浩紀編著『網状言論F改：ポストモダン・オタク・セクシュアリティ』, 青土社
- 柿原史保美1998『やおい幻論：[やおい]から見えたもの』, 夏目書房
- 佐々木悦子2005「『やおい』の起源 概論」『comic新現実』vol.4, 角川書店
- 佐藤雅樹1996「少女マンガとホモフォビア」クィア・スタディーズ編集委員会編『クィア・スタディーズ』96：クィア・ジェネレーションの誕生』, 七つ森書館
- ショット、フレデリック・L 1998『ニッポンマンガ論』, マール社
- 杉浦由美子2006『オタク女子研究：腐女子思想大系』, 原書房
- 出版年鑑編集部編1988-2008『出版年鑑』, 出版ニュース社
- 高橋すみれ2005「男同士の絆への挑戦『やおい化』する視線、その戦略に向けて：『DEATH NOTE』同人漫画を例に」『女性学年報』No.26, 日本女性学研究会
- 永久保陽子2005『やおい小説論：女性のためのエロス表現』, 専修大学出版局
- ながくばようこ2007「女性たちの“腐った夢” = 〈やおい小説〉：〈やおい小説〉の魅力とその問題性」『ユリイカ』第39号第7号, 青土社
- 中島梓1991 / 1995『コミュニケーション不全症候群』, 筑摩書房
- 同1998 / 2005『タナトスの子供たち：過剰適応の生態学』, 筑摩書房
- 名藤多香子2007「『二次創作』活動とそのネットワークについて」東園子他著『それぞれのファン研究』, 風塵社
- 西村マリ2002『アニパロとヤオイ』, 太田出版

- 荷宮和子2005「おたくの花咲く頃 特別編」『comic新現実』vol. 4, 角川書店
- 野火ノビタ1993 / 1998「やおい少女の解剖学」『総評：野火ノビタ批評全仕事』, 月光盜賊 (同人誌)
- 同2003「大人は判ってくれない：野火ノビタ批評集成」, 日本評論社
- 藤本純子2003「『ボーイズラブ』小説の変化と現在：角川ルビー文庫 (1992～1995・2000～2002) 作品の比較分析から」『待兼山論叢』第37号, 大阪大学大学院文学研究科
- 同2007a「女が男×男を愛するとき：やおいの欲望論・試論」『ユリイカ』第39号第7号, 青土社
- 同2007b「関係性からみるBLの現在」『ユリイカ』第39号第16号, 青土社
- 藤本由香里1998「私の居場所はどこにあるの? : 少女マンガが映す心のかたち」, 学陽書房
- 同2007「少年愛／やおい・BL：2007年現在の視点から」『ユリイカ』第39号第16号, 青土社
- 水間碧2005「隠喩としての少年愛：女性の少年愛嗜好という現象」, 創元社
- 溝口彰子2000「ホモフォビクなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン：最近のやおいテキストを分析する」伏見憲明編『クィア・ジャパン』vol.2, 勁草書房
- 同2003「ヤオイの言説空間を整理するこころみ」イメージ&ジェンダー研究会『IMAGE&GENDER』vol. 4, 彩樹社
- 同2007「妄想力のポテンシャル：レズビアン・フェミニスト・ジャンルとしてのヤオイ」『ユリイカ』第39号第7号, 青土社
- 三浦しをん, 金田淳子, 斎藤みつ, 山本文子2007「2007年のBL界をめぐって：そして“腐女子”とは誰か」(座談会)『ユリイカ』第39号第16号, 青土社
- 村瀬ひろみ2003「オタクというオーディエンス」小林直毅, 毛利嘉孝編『テレビはどう見られてきたのか：テレビ・オーディエンスのいる風景』, せりか書房
- 山田田鶴子2007「少女マンガにおけるホモセクシュアリティ」, ワイズ出版
- 山本文子&BLサポーターズ2005「やっぱりBLが好き：完全BLコミックガイド」, 太田出版
- 横川寿美子2001「ポスト「少女小説」の現在：女の子は男の子に何を求めているか」斎藤美奈子編著『21世紀 文学の創造7：男女という制度』, 岩波書店

【2008年9月22日受付、11月17日受理】

A Critical Survey of Yaoi Studies

ISHIKAWA Yu

Yaoi, comic or novel created by and for women, focuses on male-male relationship. It forms the widespread subcultures since the 1970's in Japan and is now attracting the world-wide concern. Yaoi studies have steadily increased since the end of the 1980's, whereas it is difficult to say that they have been given a critical survey sufficiently. This paper aims to survey the preceding studies on Yaoi from the viewpoint of the participants and clear those relative positions. Throughout this survey, this paper demonstrates that the discourses on Yaoi as a whole have been developed with relation to the social framework of patriarchy and the identity of women. This paper also examines and points out the current problems concerning Yaoi: the discriminating representations of gays and the colsed Yaoi community.